

# 韓国の打楽器アンサンブル『サムルノリ』の教材化をめぐる

—小学校・中学校・高校・大学の音楽科教育における実践的共同研究から—

田中 多佳子

(京都教育大学)

Practical Study on Korean Percussion Ensemble *Samulnori*  
as an Educational Material for the School Students of All Ages

Takako TANAKA

2006年11月30日受理

**抄録**：筆者を研究代表者とし、小学校・中学校・高校・大学の音楽教育に関わるメンバーが、平成15～17年度の教育研究改革・改善プロジェクト経費の支援を受けて行ってきた研究の総括である。本研究は、韓国の打楽器アンサンブル「サムルノリ」を共通の教材として、メンバーが討議しながら音楽実践と授業実践を行いつつ、各教育レベルに相応しい授業化モデルの構築を試みてきた。その研究全体の概要と大学における事例報告を記すとともにこの研究の意義と問題点を振り返る。

**キーワード**：教材 韓国音楽 サムルノリ リズム・アンサンブル 音楽科教育 身体化

## I. はじめに

### 1. 本論の目的と構成

「世界の諸民族の音楽」が新たな教材として指導要領に加えられて以来、教育現場では教材や授業化に関する具体的提案が待たれていた。本論は、その一つの提案を行うために、韓国の打楽器アンサンブル「サムルノリ」を題材として、小学校・中学校・高校の音楽科教育に携わる教諭と大学の音楽教育および民族音楽学の研究者が連携し、実践と理論の両面から検証し合い、各教育レベルに相応しい教材化モデルの構築を目指し、平成15年以来続けて来た研究プロジェクトの全容を報告するものである。

サムルノリとは朝鮮半島に伝わる四種の打楽器によるアンサンブル音楽である。筆者は、約20年前初めてこの音楽に触れて以来、この音楽に注目し、この音楽的特性や魅力は、小学校から大学に至るまでさまざまな音楽科教育において優れた教材たり得るのではないかと考えてきた。本学赴任を機に、本学音楽科の教員および附属桃山小学校・桃山中学校・高等学校の音楽担当教員らに呼びかけ、平成15年度から平成17年度までの3年間、教育研究改革・改善プロジェクト経費の支援のもとに、本テーマに関する共同研究を続けてきた。平成15～16年度は、「朝鮮・韓国の打楽器アンサンブル『サムルノリ』の教材化に関する実践的共同研究」と題して、さらに平成17年度はそれを発展させ「身体表現と連動した音楽演奏の学習方法とその教育的効果の研究——「サムルノリ」を教材として」と題して、継続的に研究を行ってきた。この間、研究を進めるに当たって心がけた原則は次のようなものである。(1) 授業実践者自身が専門家の指導のもとで演奏技術の習得に努めつつ授業実践を行う。(2) 可能な限り、公開・非公開のシンポジウムや公開授業、演奏の発表、ワークショップ、研究者や授業実践者、音楽家らとの交流や意見交換等を行い、軌道修正を心がける。これらの原則にしたがって、3年間に行ってきた具体的研究活動の主なものを資料1にまとめた。個人名を記していない項目は、基本的にプロジェクト全体とし

て取り組んだことを示す。サムルノリに関してほとんど手探りの状態から始めて以来3年の間に、楽器や付属品がそろう研究メンバー各人の知識や技術が向上するにつれ、授業内容も充実し、活動にも次々に新たな側面が加わってきた。何よりも各メンバーのサムルノリに対する愛着が強まり、研究プロジェクト終了後も、いくつかの活動は継続的に行われている。

3年間を通じ、自身が研究代表者として、民族音楽学的見地からの助言、大学における授業開発と検証および総括にあたってきた。多少のメンバー交代をしながらも続いてきた3年間の本プロジェクトの、研究分担者および何らかの形で関わられた方々のお名前と年度を次に記し、謝意を表す。なお、年度表記のない研究分担者は3年間を通じて関わられたことを示す。

#### 研究分担者

- 藤田加代 (附属桃山小学校教諭、初等教育における授業開発と検証)  
 藤原みつる (附属桃山中学校教諭、中等教育における授業開発の可能性に関する助言)  
 大村幸子 (附属高等学校非常勤講師、高校教育における授業開発と検証)  
 小林幸男 (元音楽科教授、音楽教育学的見地からの助言、平成15～16年度)  
 笹野恵理子 (音楽科助教授、音楽教育学的見地からの助言、平成17年度)  
 井谷恵子 (体育学科教授、身体表現としての音楽演奏に関する助言、平成17年度)

#### おもな外部助言者

- 植村幸生 (元上越教育大学助教授(平成15年度)、東京芸術大学助教授(平成16～17年度)、韓国音楽研究家)  
 和田垣究 (武庫川女子大学ほか非常勤講師、韓国音楽の授業実践についての先駆者、平成16年度)  
 具良美 (杖鼓演奏家・舞踊家、研究メンバーへの実技指導、平成15～16年度)  
 関俊泓 (杖鼓演奏家、研究メンバーへの実技指導、平成17年度)  
 南基文 (韓国国立国楽院サムルノリ指導者、平成17年度) ほか

既に本誌第6号(平成18年3月)に、共同研究者の藤田加代教諭による「サムルノリ 初等教育における授業開発と検証報告」(35～40頁)、藤原みつる教諭による『『サムルノリ』の教材化に関する実践研究——中学校における2年間の実践をとらえて』(41～47頁)、また、大村幸子講師による「サムルノリの教材化に関する実践研究——附属高校における授業実践報告」(47～55頁)など、平成15年～16年度の本プロジェクトに関連する個別論文が発表されている。本論では、平成17年度分も加えた共同研究活動の全容を示すとともに、筆者が担当した大学における事例研究についての報告を行い、最後にこの研究全体の意義と問題点を総括する。

本論の構成は以下のとおりである。

- I はじめに
- II 平成15年度活動報告
- III 平成16年度活動報告
- IV 平成17年度活動報告
- V 大学での授業実践報告
- VI 考察:音楽科教育教材としてのサムルノリ

資料1 本研究プロジェクトに関する研究活動の記録

| 年度   | 年     | 月日     | 曜日                                 | 活動内容   |
|------|-------|--------|------------------------------------|--|
| 15   | 2003  | 4月17日  | 木                                  | 田中が大学の演習科目「民族音楽学演習I」を初めて担当し、サムルノリを教材とする実践の取り組みを開始。   |
|      | 2003  | 4月3日   | 木                                  | 具良美氏の指導のもとサムルノリの練習を開始。以後7月まで具良美氏から7回にわたる指導を受け、楽曲《ウッタリブンムル》を習得。   |
|      | 2003  | 2学期    |                                    | 藤田教諭が小学校3年生を対象とする9時限にわたる授業でサムルノリに取り組む。   |
|      | 2003  | 2学期    |                                    | 藤原教諭が中学校2年生を対象とする3時限にわたる授業でサムルノリに取り組む。   |
|      | 2003  | 2学期    |                                    | 大村講師が高校2年生の授業1時限でサムルノリを取り上げる。さらに希望する生徒たちと放課後の課外活動として自主練習を重ねる。  |
|      | 2003  | 11月6日  | 木                                  | 藤陵祭前夜祭で楽曲《ウッタリブンムル》を初めて公開演奏する。   |
|      | 2003  | 11月11日 | 火                                  | 8時55分～16時30分、サムルノリの教材化をめぐる4部構成による一連の催しを開催。<br>I：附属桃山小学校・中学校での公開授業、II：大学でのワークショップ「サムルノリ体験講座」、III：大学でのシンポジウム、IV：附属高校でのレクチャーデモンストレーション。 |
|      | 2003  | 12月6日  | 土                                  | 児童の希望により附属桃山小学校の学芸会で3年生が合奏「まねっこサムルノリ」を発表。以後、毎年学芸会での恒例となる。  |
| 16   | 2004  | 4月4日   | 日                                  | ふれあい伏見フェスタの企画「アジアの音色に親しもう」で前座としてサムルノリを演奏。  |
|      | 2004  | 7月16日  | 金                                  | 田中が「朝鮮半島の音楽—その1」として勉強会を開く。   |
|      | 2004  | 7月27日  | 火                                  | 自主練習を続けてきた楽曲《ヨンナムノンアク》について具良美氏による実技指導を受ける。   |
|      | 2004  | 8月6日   | 金                                  | 自主練習を続けてきた楽曲《ヨンナムノンアク》について具良美氏による実技指導を受ける。   |
|      | 2004  | 11月20日 | 土                                  | 藤陵祭のメインステージで公開演奏を行う。研究メンバーの田中・藤田・大村ほか学生ら全10名が参加。《ウッタリブンムル》と《ヨンナムノンアク》の2曲の演奏および楽器紹介などを行う。   |
|      | 2004  | 12月20日 | 月                                  | 韓国音楽を教材とする音楽科教育に長年取り組んで来られた和田垣究氏を招き、「韓国音楽による授業実践をめぐる」と題した講演をいただく。  |
| 17   | 2005  | 4月3日   | 日                                  | ふれあい伏見フェスタの企画「アジアの音色に親しもう」でサムルノリの演奏およびワークショップを行う。  |
|      | 2005  | 5月31日  | 火                                  | 関俊泓氏の指導のもとソルチャンゴへの取り組みを開始。以後、2006年3月まで26回にわたる指導を受ける。   |
|      | 2005  | 6月30日  | 木                                  | 田中担当の大学の演習科目「民族音楽学演習I」の授業に本学訪問中の春川教育大学校の一行が参加。サムルノリを介した交流を行う。  |
|      | 2005  | 6月30日  | 木                                  | 大学主催で音楽演奏室で春川教育大学校一行と本学との交流コンサートが開催される。本学音楽科有志による和太鼓演奏の後、春川教育大学校一行によりサムルノリを含むさまざまな韓国音楽が披露された。  |
|      | 2005  | 9月8日   | 木                                  | 本学を訪問中の南基文氏（韓国国立国楽院講師）から研究メンバーが演奏実技や楽器のメンテナンス法についての指導を受ける。解説・通訳は植村幸生氏（東京芸術大学助教授）。  |
|      | 2005  | 9月8日   | 木                                  | 教育実践総合センター主催第4回教育を考えるワークショップ「韓国の打楽器アンサンブル《サムルノリ》ステップアップ講座」開催。講師は南基文氏（韓国国立国楽院講師）、解説・通訳は植村幸生氏（東京芸術大学助教授）。                              |
|      | 2005  | 9月10日  | 土                                  | 新潟県で日本音楽教育学会により開催された第8回音楽教育ゼミナール2005「音楽教育の実践と研究の新たな展望」に参加し、南基文氏のワークショップ「韓国音楽ブンムル（農楽）」の補佐役として演奏および指導補助を行う。                            |
|      | 2005  | 11月13日 | 日                                  | 藤陵祭のメインステージで田中ほか学生ら全6名が公開演奏。サムルノリの2曲の楽曲演奏と楽器紹介など。  |
|      | 2006  | 3月27日  | 月                                  | 田中、藤田教諭を含む6名で「京都教育大学音楽科教員によるKYOKYOコンサート」に出演し、ソルチャンゴを公開演奏。  |
|      | 2006  | 3月29日  | 水                                  | 附属桃山小学校を会場として開催された多文化音楽教育2006シンポジウムin京都にて、田中がサムルノリのワークショップおよび「学校教育教材としてのブンムル」と題して研究報告。   |
| 2006 | 3月31日 | 金      | 藤田、藤原、大村が実践報告を発表した『教育実践研究紀要』第6号発行。 |  |
| 18   | 2006  | 4月1日   | 土                                  | ふれあい伏見フェスタの企画「アジアの音色に親しもう」でサムルノリの演奏およびワークショップを行う。  |

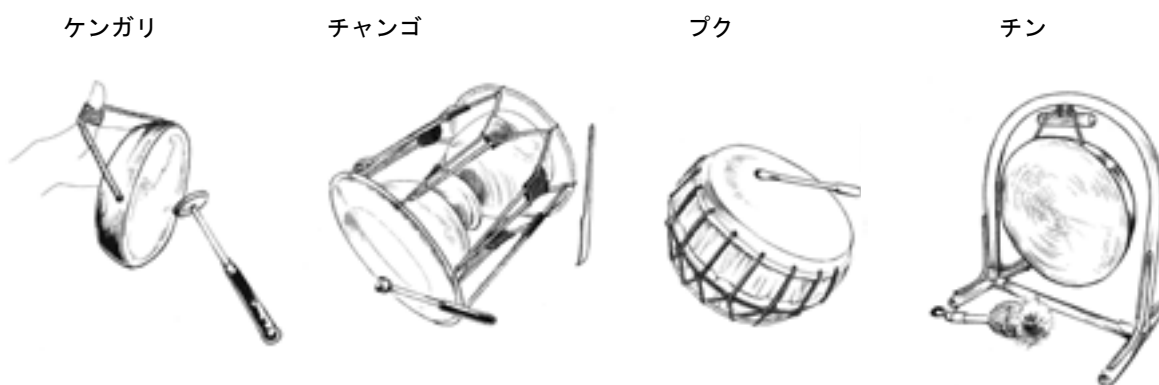
## 2. サムルノリとその学習

報告の前に、研究対象としたサムルノリという音楽についての概略を示しておく。

### (1) サムルノリとは

サムルノリとは、字義通りには、「サムル(四物)」すなわち四種の楽器による、「ノリ」すなわち「遊び(あるいは演奏)」を意味する。具体的には、資料2のように小型の銅鑼「ケンガリ」、大型の鼓「杖鼓(チャンゴ)」、両面太鼓「プク」、大型の銅鑼「チン」の4種の打楽器を用いた合奏音楽をさす。四つの楽器の役割分担は、もともと音の鋭いケンガリの奏者が指揮者のように全体をリードし、チャンゴが基本パターンを演奏し、プクはチャンゴのリズム・パターンのアクセントを補強し、チンはフレーズを作るといったところである。

### 資料2 サムルノリの楽器



サムルノリは、韓国では今日、スポーツの試合の応援や学生らによる政治的なデモ活動などさまざまな場面でもよく行われる、最もポピュラーな音楽芸能の一つであり、朝鮮半島の代表的伝統芸能として世界にも広く知られるようになってきた。しかし、これは朝鮮半島中部・南部を中心に村落共同体の行事として行われてきた打楽器の合奏を含む民俗芸能「<sup>ブンムル</sup>風物ノリ」(20世紀に入ってからは<sup>ノリ</sup>農樂と総称される)が、1978年に<sup>キムドクス</sup>金徳珠らによって舞台公演用にアレンジされ新たに生まれかわった音楽ジャンルである。

ブンムルノリは、本来、村の年中行事や農耕儀礼との深い結びつきの中で、村人自身や村人によって招かれた放浪の芸能集団「<sup>ナムサダン</sup>男寺党」ら専門家集団によって行われてきた。用いられる楽器の種類も四物より多く、音楽演奏というよりは祭礼や舞踊劇の一部として行われた。男寺党が行う場合には、さらに皿回し、軽業、綱渡り、仮面劇、人形劇などの演目も伴っており、娯楽の少ない村人たちの慰めであったという。男寺党とは、韓国の伝統的な放浪芸人集団のひとつであり、その名の通り男性だけで構成されていた。男寺党の芸能は日本による植民地化などの影響により廃れつつあったが、1960年代以降、彼らの末裔らによりその芸能が復活され、国の重要無形文化財指定を受け国家的伝承の努力がなされてきた。

ブンムルノリの習慣は各地に細々と残るが、そこから生み出されたサムルノリは特に、今日、朝鮮半島の人々にとっても人気があり、若者たちの間でも学校教育においても盛んに行われている。したがって、サムルノリは、音楽的に朝鮮半島の伝統的な要素を多く残しており、その芸能が本来持っていた社会的脈絡や儀礼などと切り離して舞台用の純器楽としても楽しむことができ、さらに旋律楽器がなく打楽器ばかりなので、外国人にとっても比較的学びやすい音楽であるといえる。

(2)サムルノリのレパートリーと学習法

サムルノリのレパートリーは、金徳珠ら男寺党的の伝統を継承する名人たちが、ブンムルで演奏されていた各種の「長短」と呼ばれるリズム・パターンとそれを基礎として作られたリズムのフレーズ(カラク)をつなぎ合わせ、自らの卓越したテクニックをふんだんに織り込みながら、舞台用に再構成したものである。主要曲には、慶尚道地方のブンムルのチャンダンによる《嶺南カラク》(あるいは《ヨンナムノンアク》)、京畿・忠清道地方の《ウッタリブンムル》、全羅道地方の《湖南カラク》などがある。これらを総称して《三道農楽カラク》と呼び、各々の特徴的フレーズがメドレーのように演奏されることもある。

サムルノリの学習は、チャンダンをチャンゴの基本的打法を示す口唱歌(韓国語で口音)で練習し身体化することによって進められる。例えば、右手に持った細い竹のバチ(ヨルチェ)で右面を打つ打法は「タ」と表現され、左手に持った先端が丸く太いバチ(クングルチェ)で左面または右面を打つ打法は「クン」、また、「タ」と「クン」を同時に打つ奏法は「トン」という口唱歌で表現される。基本的には楽曲は口頭伝承で伝えられてきたものの、中国の井間譜を参考として考案された記譜法で書き記されることもある。チャンダンは、地方や音楽ジャンルによってさまざまな種類のものがある。資料3は、「フィモリ」と呼ばれるよく知られたチャンダンを、そうした記譜法を参考に少しアレンジして、チャンゴの奏法と口唱歌を中心に示したものである。「|」は「タ」、「⊕」は「トン」、「●」は左面を打つ場合の「クン」、「○」は右面を打つ場合の「クン」を示す。参考までに他の楽器が打つ箇所を○で下に示す。

資料3 フィモリ・チャンダンの基本パターン

|      | 1  | 2   | 3     | 4  | 1  | 2   | 3     | 4  |
|------|----|-----|-------|----|----|-----|-------|----|
| チャンゴ | ⊕  |     | ●   ● | ●  | ⊕  |     | ●   ● | ●  |
|      | トン | タ タ | クン タ  | クン | トン | タ タ | クン タ  | クン |
| ケンガリ | ○  | ○ ○ | ○ ○   | ○  | ○  | ○ ○ | ○ ○   | ○  |
| プク   | ○  |     | ○     | ○  | ○  |     | ○     | ○  |
| チン   | ○  |     |       |    | ○  |     |       |    |

## II. 平成 15 年度活動報告

2年度にわたる研究プロジェクトとして採択された「朝鮮・韓国の打楽器アンサンブル『サムルノリ』の教材化に関する実践的共同研究」の1年次には、田中以外のメンバー全員がサムルノリという音楽をほとんど知らなかったため、まず対象についてよく学ぶことから始めた。

### 1. 資料・情報収集および情報交換

メンバーは各自資料・情報を収集しつつ、練習以外に4回の打ち合わせ会議を開き、情報交換を行った。特に韓国で発行された楽譜などを入手し、それらを参考に簡単にアレンジした前述のような記譜法を考案し、以後、自分たちが学習内容を記録するのに使用した。生徒に対しては、口唱歌およびそれをカタカナで書いた楽譜を使用した。

### 2. 実技の習得

4月から7月にかけてチャンゴの演奏家、具良美氏(クリヤミ)を招き、打ち合わせ以外に計7回の実技指導(各2時間程

度)を受けた。各楽器の基本的な奏法から始め、簡単なチャンダンや《ウッタリプンムル》という楽曲を習った。指導の様子は全て録画して分析や記譜を行った。実技指導終了後もそれらの資料をもとに自主練習を重ね、11月6日の藤陵祭で初めて公開の場で演奏し練習成果を発表した。

### 3. 研究事業の開催

以上の成果を中間発表として公開し、多くの人々の助言を得て知識を深めるために、附属教育実践総合センター主催、京都府・京都市教育委員会後援により、11月11日(火)に8時55分から16時30分にわたる「朝鮮・韓国の打楽器アンサンブル『サムルノリ』の音楽科教育における教材化をめぐる」と題する大がかりな催しを行った。全体は、公開授業、ワークショップ、シンポジウムおよびレクチャー・デモンストレーションの4部で構成した。セッション1では具体的教材化を試みた授業の一部を公開した。1限では附属桃山小学校で藤田加代教諭による3年生の授業「まねっこサムルノリ」が、2限では附属桃山中学校で藤原みつる教諭による2年生の授業「世界の音楽に親しもう——朝鮮半島」が公開で行われ、後者ではサムルノリ演奏グループ「ファニー・コリア」による模範演奏も行われた。セッション2は、京都教育大学音楽演奏室でワークショップ「サムルノリ体験講座」を行った。具良美氏を含む演奏グループ「ファニー・コリア」の演奏を鑑賞すると同時に、田中が聞き手となって楽器の演奏法の説明を受け、参加者が簡単な手ほどきを受けた。セッション3は同所でシンポジウム「サムルノリの学校教育における教材化をめぐる」を開催した。研究分担者がパネリストおよび司会をつとめ、朝鮮・韓国音楽の研究者である植村幸生氏(当時上越教育大学助教授)を招いて討論し、音楽に対する知識と理解を深めると同時に、授業経験を踏まえて全員でその適切な教材化のあり方を検討した。セッション4として、



シンポジウムの様子(2003年11月11日)

附属高校メディアセンター多目的ホールで高校主催によるレクチャー・デモンストレーションが行われた。学年の制限なくサムルノリに興味をもつ高校生たちを主たる対象とする、異文化理解のための放課後の課外の催しとして公開で行われた。まず、課外活動として自主練習を重ねてきた附属高校の生徒有志に対し具良美氏による公開レッスンが行われ、大村幸子講師がそれについて解説し、その後、ファニー・コリアによる模範演奏が披露された。この試みはこの年度の総括とすべく労力をかけて準備したが、宣伝不足からか時期が悪かったのか、参加者数が全体で40名弱、シンポジウムに限ると数名と非常に少ないのが残念であった。しかし、内容的にはとても充実したものとなり、研究メンバーは今後の研究活動に対する大きな指針を得ることができた。

## Ⅲ. 平成16年度活動報告

「朝鮮・韓国の打楽器アンサンブル『サムルノリ』の教材化に関する実践的共同研究」の2年次であり、前年度の成果の内容的深化と集大成に努めた。具体的には、メンバー自身が演奏実践の訓練を重ねてさらに高度な技術の習得をはかるとともに、勉強会を開催してより本質的な音楽の理解をはかった。また、前年度のシンポジウムでの反省から、大規模な催しよりもメンバーが実質的に学べる機会をめざすこととし、教育現場でのサムルノ

りを含む韓国音楽の教育実践経験の豊かな和田垣究氏を講師に招き、その体験にもとづいた教材化の意義と問題点などについて講演を拝聴すると共に、活発な意見交換を行い大きな示唆を得た。詳細は紙面の都合上省略する。

## IV. 平成 17 年度活動報告

### 1. 活動の目的

平成15～16年度の2年度にわたる「朝鮮・韓国の打楽器アンサンブル『サムルノリ』の教材化に関する実践的共同研究」の結果、この音楽が、西洋音楽とも日本音楽とも異質な音楽的特徴を持ち、いずれの年齢層にも親しまれる音楽的魅力と導入しやすいがまた音楽的奥深さをも備えた、リズム・アンサンブル実践のためのとても有効な教材であることを確認した。平成17年度はそれを踏まえて、その成果をさらに発展させ「身体表現と連動した音楽演奏の学習方法とその教育的効果の研究——『サムルノリ』を教材として」として教育研究改革・改善プロジェクト経費の支援を受けることとなった。その目的は、音楽を身体性を備えた文化的・複合的・連続的表現活動の一環として学習させ、本当の意味での「音楽すること」、具体的には身体運動と一体化したリズム感や躍動感とその醍醐味を体験させ、幅広い音楽感覚や表現能力を高めるような教育方法と効果を追求することであった。「play」あるいは「遊び」と表現されるように、本来音楽とは、いかなる文化においても演劇性や身体性、娯楽性等を備えた総合芸術、パーフォーミング・アーツの一部の構成要素であることが多い。今日、音楽教育の現場では、音楽の音響的性質のみに過度な比重が置かれ、音楽のそうした側面に対する実感を持つ機会はほとんどない。

今年度の研究は、この「サムルノリ」を通じて、音楽を身体性を備えた文化的・複合的・連続的表現活動の一環として学習させ、本当の意味での「音楽すること」、具体的には身体運動と一体化したリズム感や躍動感とその楽しさを体験させ、幅広い音楽感覚や表現能力を高めるような教育方法と効果を追求を目指した。具体的には、知識を得るための勉強会よりも、体験型の研究活動に比重をおき、演奏家関俊泓氏の実技指導のもとで、サムルノリを「座って演奏する」（アンジュン・バン）技術の習得のみならず、南基文氏の指導でそれを歩いたり簡単な動作をつけたりしながら演奏する「キルノリ」にも触れた。さらに最終的には、関氏の指導と激励のもとに「立って複雑な身体の動きを伴いつつ隊列を組んで」（ソンバン）行う、チャンゴ合奏「ソルチャンゴ」にも挑戦した。

### 2. ワークショップの開催

(1) 教育実践総合センター主催、京都市・京都府教育委員会後援により、9月8日(木)18時より20時まで京都教育大学音楽演奏室において、「第4回教育を考えるワークショップ：韓国の打楽器アンサンブル《サムルノリ》ステップアップ講座」を開催した。これは、打楽器演奏「サムルノリ」を単にリズム的な楽曲として演奏するのではなく、この芸能本来の楽器をつけて演奏しながら歩いたり踊ったりするという形態に挑戦し、身体表現としての習得及びその指導方法を考えることを目的として開催した。



植村幸生東京芸術大学音楽学部助教授のご助力により、韓国の第一級のサムルノリ演奏家、南基文<sup>ナムギムン</sup>韓国国立国楽院講師を本学に招くことができ、植村氏の通訳および解説により、研究プロジェクトメンバーを含む参加者が南氏に実技指導いただくという形で進行した。参加者全員がサムルノリの楽器のうちの一つを担当し、全員でチ

ヤンダンの基本的奏法を学んだ後、それを行進したり時にはかけ足したり、身体を動かしたりしながら演奏すること(キルノリ)の指導を受け、音楽関係者以外の参加者からも楽しかったとの好評を得た。

(2) これまで本学で行ってきたサムルノリの研究実践が日本音楽教育学会関係者の耳に入り、第8回音楽教育ゼミナール“2005” 妙高ゼミナール「音楽教育の実践と研究の新たな展望」におけるワークショップの一つを担当するよう依頼された。これは、9月10日(土)の14時半より17時50分まで、新潟県妙高高原の野外劇場で行われる「韓国音楽ブンムル(農楽)」のワークショップであった。基本的には本学で行った(1)の内容と同様の形で行ったが、南基文氏と並ぶサムルノリの第一人者<sup>キムジョンサム</sup>金鐘三氏も指導に参加して下さったため、さらに贅沢な内容となった。だが、野外の会場で行ったため途中からの豪雨で中断を余技なくされたことが残念であった。南氏と息のあった金氏が参加したことで、内容の構成から進め方、発語、しぐさ、表情に至るまで、本場の演奏家の経験・技術・思考が如実に現れたワークショップとなり、サムルノリという大衆芸能のたくましさを醍醐味といったものを垣間見ることができた。



### 3. 身体的動作を伴う実技の習得と発表

平成15年度以来、3回目となる藤陵祭参加に加え、4月のふれあい伏見フェスタでもワークショップを行った。こうした活動により、レパトリーが増え技術的にも進歩した練習成果を披露する機会を得ると同時に、観客の反応に触れたり、ワークショップでは子どもたちとサムルノリを介して触れ合ったりすることができた。衣装をつけて行うことにより、さらにこの芸能や文化的側面にも鑑賞者の関心を向けることができるようになった。附属養護学校関係者はこのプロジェクトには参加していないが、ふれあい伏見フェスタで開催したワークショップには中学部の生徒と教師が訪れ非常に積極的に参加してくれた。また、幸運なことに、2006年3月27日(月)、京都コンサートホールで、川口容子教授代表による教育研究改革プロジェクトの一環として、音楽科教員が何らかの形で全員参加するという「京都教育大学音楽科教員によるKYOKYOコンサート」が開催されることとなった。その公演を目標として初めてのソルチャンゴに挑み、拙いながらその成果を発表することができた。(右図)



関係者はこのプロジェクトには参加していないが、ふれあい伏見フェスタで開催したワークショップには中学部の生徒と教師が訪れ非常に積極的に参加してくれた。また、幸運なことに、2006年3月27日(月)、京都コンサートホールで、川口容子教授代表による教育研究改革プロジェクトの一環として、音楽科教員が何らかの形で全員参加するという「京都教育大学音楽科教員によるKYOKYOコンサート」が開催されることとなった。その公演を目標として初めてのソルチャンゴに挑み、拙いながらその成果を発表することができた。(右図)

## V. 大学での授業実践報告

### 1. サムルノリに関わる授業の概要

平成15年度より「民族音楽学演習 I, II」の授業を担当することになった。これまで主に楽器作りを中心とする授業が行われていたが、筆者は目標を世界の様々なリズム・アンサンブル体験に定め、基本的に数人のグループに分かれて行うアンサンブル活動を中心にすえることにした。その中でサムルノリをとりあげることにし、受講人数と楽器数の制約、時間配分などを考慮し、90分の授業時間を45分ずつの前後半に分け、異なる音楽活動を行うことにした。受講者全員が半期間に、サムルノリと、映像資料から選んだ他の任意のリズム・アンサンブル



ル2種に触れることを目指した。1グループ5～8人くらいを目安とし、グループが二つできるときには、一方のグループがサムルノリを練習している間、もう一方のグループは自分たちの選んだ映像資料を分析・模倣し、練習によって消化する活動を行う。半期の授業期間をさらに前・後半に分け、前半期に学習した任意のアンサンブル音楽とサムルノリの練習成果を公開で演奏する中間演奏試験を、期末には別の任意のアンサンブル曲とサムルノリの演奏を行う期末演奏試験を行う。評価は受講者全員と観客にも参加してもらい、努力度・アピール度・忠実度などの項目別に、点数や感想を記入する採点票に記入してもらい、試験後、採点票を読み、試験の録画を見ながら反省会を行い、うまくいったところや今後の課題等話し合う。Iの単位修得者はIIを受講することができるが、IもIIも基本的に同じ形態で行った。

以下、サムルノリの活動に関わる部分についての詳細を述べる。Iでは《ヨンナムノンアク》を、IIで《ウッタリプムル》という楽曲を練習した。IIのIとの違いは、2曲をサムルノリのどの楽器でも演奏できるようになることを目指す点、変奏や楽器同士のかけあいなどを加え、曲の仕上がりの精度をあげるよう努力する点などである。

## 2. サムルノリの音楽科教材としての利点

既にこの授業は、平成15年度前期12名、平成16年度前期5名、後期6名、平成17年度前期23名、後期8名、今年度前期8名の延べ62名が履修し、後期8名が履修中である。前項で述べたように、半期に2度は反省会を行っているが、学生たちの意見には「楽譜もメロディーもなくはじめはとまどうばかりだったが、徐々に楽しさが増してきた。もっとうまくなりたいと欲が出てきたところで終わってしまう。」というようなものが多い。長年西洋音楽を学んできた学生たちほど、ある種のカルチャーショックが強いが、練習を重ねてゆくうちに、これまでのものと違う尺度でこの音楽を聴き自然に楽しむことができるようになるようだ。今年、教員採用試験に合格したある学生が、「この授業でサムルノリを体験したことで諸民族の音楽の指導案が非常に具体的に書けたことが勝因につながったと思う」とわざわざ話しに来てくれた時には心強い思いがした。教員採用試験に合格させることが授業の目的ではないが、学生自身がとても遠く感じてきた「諸民族の音楽」が身近なものとなり、楽しい教材として生徒たちにいきいきと指導することができるようになるのであれば、それは本研究の一つの成果と認めてよいだろう。

大学でサムルノリを教材とする授業実践を行ってきた中で有効と感じられた主な点を次にあげる。

- (1) 口頭伝承による音楽学習システム体験の有効性：五線譜を用いず基本的に口頭伝承を通じて学習する形体自体が、楽譜というものに頼りきって音楽を学習してきた学生たちにとって新鮮であるようだ。このシステムのために、記楽譜し得ない音楽の諸要素が聴きとれるようになったり、必要に迫られて独自の記譜法を考案したり、楽器奏法を特定のシラブルで表現する口唱歌という方法を他の音楽にも転用しようとしたりする姿も見られた。
- (2) 独自の音楽性の開発：学習当初はリズム構造そのものが違う音楽の習得にとまどいが見られ、習得に比較的時間がかかる。しかし、ひとたびコツをつかむと興味がわき、全員で積極的に変奏や曲想の変化をつけようとする工夫が見られるようになり、サムルノリ独自の音楽性が発揮されるようになってゆく。
- (3) 音楽としての魅力：Iの履修後、サムルノリに魅力を感じるようになり、引き続きIIを履修する学生が多い。授業としての履修が修了した後も課外活動として練習を続け、教師として現場に立ちサムルノリをとりあげている卒業生も数人いる。しかも、音楽科以外の学生も含め、この音楽に音楽的拒否反応を示す学生はほとんどいない。
- (4) 学生間の連帯感の構築：アンサンブル教材としては、演奏者の工夫により作り上げてゆける自由な余地が破格的に大きく、全員によるアイコンタクトや話し合いが要求され、相互の連帯感、一体感が構築されやすい。
- (5) 異文化音楽体験としての意味：実技としては西洋音楽以外にあまり触れたことのない学生たちが異文化の音楽に親しんでゆくことによって、朝鮮半島の文化そのものに対する興味が喚起されることはもちろんのこ

と、西洋音楽以外のスタイルを持つ音楽に対する違和感や抵抗感が薄れてゆく。

以上のように、大学生レベルにおいても、西洋音楽とは異なる音楽科教材としての利点が観察された。

## VI. 考察: 音楽科教育教材としてのサムルノリ

以上、平成15年以来、サムルノリの教材化をテーマとして行ってきた共同研究活動の概要を記した。このような研究の結果、メンバーの所属するすべての学校で、程度の差はあれ、サムルノリを何らかの教材として取り上げることがほぼ定着し、児童・生徒・学生たちの間にこの音楽の存在が浸透しつつある。各校で楽器もある程度の数がそろい、学生・生徒の自発性に応じた練習体制も整い、特に附属桃山小学校では児童の自発性にもとづいて毎年学芸会の演目として取り上げられ上演されることが定例化している。個々の校種や児童・生徒の年齢に応じた評価については先述の個別論文を参照していただきたいが、最後に、これらの一連の活動から明らかとなったサムルノリの音楽科教材としての利点と、今後の授業展開における課題を整理しておきたい。

まず、音楽科教材としての利点としては次のような点があげられる。

- (1) 旋律楽器を持たないリズム・アンサンブルなのでリズム的側面だけに集中できる。藤原教諭も指摘するように「世界の諸民族の音楽」としてのみならず、リズム教育のための教材としても適している。
- (2) 打つという手の動作にとどまらない大きな身体運動や呼吸法に直結したリズム感を体験することができる。この点では体育科教育などとも連動させた「表現」教育のための教材としての可能性も感じられる。
- (3) 現地の楽器が比較的安価に入手可能で、比較的こわれにくい。
- (4) 西洋音楽とも日本音楽とも異質な長短という独特の拍子感が体験できる。
- (5) 幅広い年齢層に支持される音楽的魅力と導入しやすさ、音楽的奥深さを兼備している。
- (6) いわゆる芸術音楽ではなく、農耕儀礼と結びついた大道芸・放浪芸に発する文化的背景という他の音楽科教材にはない特徴をもつ。

だが、その一方で、学校教材としてサムルノリをみた場合、次のようなことが現実的な課題となろう。

- (1) 本プロジェクトのように教員自身が専門家から実技指導を受けない限り指導することが難しい。
- (2) 楽器の調達および管理：ピアノや和楽器に比べればサムルノリの楽器は比較的廉価であるといえるが、楽器収納のためのスペースやメンテナンス技術が必要である。
- (3) 旋律がなくリズムだけの音楽は単調であるという感想を持たれやすく、教師の指導力と工夫が必要である。
- (4) 絶対的音量が大きく、大きな打撃音を苦手とする児童・生徒には向かない。練習場所の確保が難しい。

このように、現実的に解決しなくてはならない問題はいくつかあるものの、全体的としてサムルノリは実に魅力的で有益な音楽科教材であることが確認できた。今後もひき続きこの音楽と向かい合い、その特性と指導法を考えてゆきたい。

参考文献：

植村幸生「伝統の至芸 サムルノリ」『月刊しにか』12巻7号(2001年)、60～61頁

植村幸生『韓国音楽探検』(音楽之友社、1998年)

志村哲男「男寺党とその芸能」『世界民族音楽大系解説書Ⅰ』(平凡社+日本ビクター、1988年)47頁

日本音楽教育学会「第8回音楽教育ゼミナール“2005” 妙高ゼミナール『音楽教育の実践と研究の新たな展望』報告書」(2006年)